

会 議 録

会 議 名	第3回野田市生物多様性のだ戦略市民会議
議題及び議題毎の公開又は非公開の別	【議題】 (1) 協議事項1 尾崎金島地区環境調査の令和7年度分の結果について
日 時	令和8年3月23日(月) 午前11時30分から12時30分
出席委員氏名	【対面参加】 会 長 長谷川 雅美 副会長 茂木 康男 委 員 新保 國弘、朽津 和幸、田中 勝美、柄澤 保彦、 岩槻 秀明、石川 祐一、香西 陽一郎、大森 明美、 萩原 義則、菅谷 光夫、柳澤 勉、浅井 裕子
事 務 局	宇田川 克巳(自然経済推進部長) 石塚 武雄(自然経済推進部次長) 茂木 嘉則(みどりと水のまちづくり課長) 知久 剛巳(みどりと水のまちづくり課長補佐) 池上 真理子(みどりと水のまちづくり課自然保護係長) 後藤 旭(みどりと水のまちづくり課自然保護係主事補)
欠席委員氏名	本田 裕子、岡安 誠人、鈴木 哲雄
傍 聴 者	0名
議 事	第3回野田市生物多様性のだ戦略市民会議の会議結果(概要) は次のとおりである。

1 開会

《事務局：池上係長》

委員総数 18 名のうち、15 名が出席しており、条例の規定により本会議が成立している旨を報告した。欠席委員は、本田裕子委員、岡安誠人委員、鈴木哲雄委員である。また、本会議は原則公開とする運営要綱に基づき公開で開催すること、議事録作成のため録音を行うこと及び会議資料作成のため写真撮影を行うことを説明した。あわせて、傍聴者については現時点で申込みはないが、審議途中で希望があった場合は、随時受け入れることについて説明し、ご了承をいただく。

2 部長挨拶

《事務局：宇田川部長》

本日は多忙の中、市民会議へ出席いただいたことに御礼を申し上げる。時間も限られていることから、簡単に挨拶させていただく。

前回会議終了後に、委員から委員全員で現地を見た方がよいという意見があり、今回は現地をご案内し、その状況を踏まえたご意見をいただくことを目的として、事務局より提案したものである。

戦略の着実な実行に向けて、現地の状況を確認しながらご意見を伺うことが重要であると考えている。本日もご覧いただいた尾崎・金島地区に限らず、今後ほかの場所も含め、将来にわたりどのように自然環境を保全していくかについて、忌憚のないご意見をいただきたい。

本日の会議においても、活発な意見交換をお願いします。

3 変更委員の紹介

《事務局：池上係長》

異動により一部委員の変更があったため、紹介を実施。

《事務局：池上係長》

以降の議事進行については、野田市生物多様性のだ戦略市民会議条例第 6 条第 1 項の規定により、本会議会長である会長より議事進行を行うこととする。

《会長》

尾崎金島地区を確認し、さまざまな観点から考える機会となった。地域の経済については、物流倉庫の位置や生産拠点の増加による税収への影響、改めて江戸時代から現在に至る地域の発展の中で何が重要であったのかについて、改めて認識した。また、本日確認した場所については、生き物や生物多様性の観点に加え、地域の受け止め方や、そこに住む人々の視点など、複数の観点から捉える必要があると感じた。

4 議題

【協議事項 1】尾崎金島地区環境調査の令和 7 年度分の結果について（資料 1）

《事務局：茂木課長》

資料 1 を説明。

《事務局：宇田川部長》

本日、尾崎金島地区を見ていただき、また、今回中間報告を説明させていただいた。これを踏まえ、尾崎金島地区の環境に対する感想や、現在の調査内容についての意見を伺いたい。調査の不足点や、追加すべき観点等についても、忌憚のない意見をいただきたい。今後も調査は継続するため、その点も含め、意見をお願いします。

《会長》

先ほど宇田川部長からもあったとおり、この地域における生物的なポテンシャルをどのように引き出していくかが重要であると感じた。現地では、岩槻委員からポテンシャルはあるものの、なかなか引き出せていないとの意見もあったが、その要因としては、人間だけでなく、生き物同士の関係性も影響していると考えられる。ある生き物が存在することで、別の生き物が生息できるようになるなど、生き物同士の良い部分をお互いに引き出しあって、生物多様性が形成されていると感じた。

例えば、鳥類は空を飛び広域に移動できるため地域差が小さいが、小さな昆虫は食草や環境条件の影響を強く受けるため、地域ごとの特徴が現れやすい。そのため、多様な生き物が生息しているということは、それぞれが地域資源を活用している状態であり、ポテンシャルが引き出されている結果であると考えられる。本日確認した尾崎金島地区においても、水環境に制約された植生が、多様な昆虫等の生息につながっている可能性があると感じた。このように、生物多様性が地域のポテンシャルをどのように引き出しているのかという観点で整理することが重要であると考え。また、生き物が生息できる環境を維持するためには、人間の関わりや地域の経済的な状況も重要であると感じた。以上を踏まえ、引き続き皆様からの意見を伺いたい。

《委員》

報告書や現地の状況、今後の進め方を踏まえ、いくつか提案を含めて、今後確認していくとよいと考える点について述べる。まず 1 点目として、今回の環境調査において、水質の調査は実施する予定であったか。

《事務局：宇田川部長》

実施予定はない。

《委員》

水質調査は行わないとのことであるため水質が気になると感じたが、水温については調査を行うとのことであり、水温や水質によって生物相が変わってくる可能性があることから、今後、水質についても把握できるとよいと考える。

次に、植物の観点からの提案であるが、尾崎金島地区は湿地環境であり、江戸川や上流の五駄沼は、かつては多様な水草が生息していた場所である。そのため、埋土種子（シードバンク）がどの程度残存しているのかについて、調査を行うことも一案であると考えている。

試験的に自分で掘ってみたが、表層では確認が難しく、より深い層での調査が必要であると感じた。また、その際にはヒカリモが多く確認されており、天然記念物となっている場所もあることから、かなり生息の可能性があると感じた。

さらに、土壤生物についても、短期間での把握は難しいものの、長期的な視点で調査を行う必要があると考える。加えて、アナグマについても言及したい。本調査で確認されているが、市内全体での生息状況は把握されていない可能性がある。類似の痕跡や目撃情報もあることから、今後、市内全域での状況把握を行うことも有効であると考えている。

《会長》

アナグマはミミズを食べるため、餌によって出現しているというよりも、巣穴として掘りやすく、踏みやすい土壌があることに意味があると考えられるが、そういった場所には一定程度ミミズが生息している。

《委員》

そのミミズについても、分類に詳しい者がいないため調査がほとんど行われておらず、どのようなミミズが生息しているのか把握されていない状況である。ミミズについては図解等の資料も限られており、自身でも対応が難しいと感じている。尾崎金島地区に限らず、市内のミミズについては関心を持つ必要があると感じている。

《委員》

先ほど会長からの発言に関連するが、今後「生物多様性の戦略」を進めていくにあたり、観点をある程度絞っていく必要があると感じた。野田市の生物相を踏まえ、「重要と考えられる対象」を整理していく必要がある。レッドデータに掲載される種は指標となるが、そのほかに、野田市独自の希少生物についても検討する必要があると考える。今後、「生物多様性の戦略」を継続していく中で、評価の基準となる目印がない場合、生物相の変化を適切に捉えることが難しくなる可能性がある。また、要注意種についても整理しておく必要があると考える。特定外来生物に加え、新たに侵入している外来種についても把握していく必要がある。本日視察した尾崎金島谷津では、ムネアカハラビロカマキリの生息が見られた。本種は在来種より大型であり、在来種のハラビロカマキリと同様に木の上に生息している。野田市内では尾崎金島地区から野田病院周辺にかけて分布が確認されている。愛知県の豊田市では在来種のハラビロカマキリが減少し、本種が繁殖している事例も報告されていることから、今後の動向に留意する必要があると考える。このように、要注意生物に

についても分野ごとに整理し、リスト化していくことが必要である。

なお、現地視察で話題に挙がったアカガエルについては、約 10 年前には卵塊が確認されていたが、近年は確認していない状況である。

《会長》

現在、レッドデータブックに掲載されている種や特定外来種など、国や県のレベルで条例等により対応すべきとされている生き物だけでなく、その地域における要注意種という視点も必要であると感じている。「要注意」というと注意するという意味になるが、むしろその生き物が存在していることを評価するような視点もあるのではないかなと思う。その生き物が地域の中でどのような役割を果たしているのかを見極めることが、尾崎金島地区のようなエリアでポテンシャルを引き出す上で重要であり、どの生き物に注目するか、またその生き物に注目することで地域の人がある場所を受け入れ、「ここにいてほしい」と思えるようになることが重要であると感じている。

例えば、セミは一般的にどこでも見られるが、船橋市では夏に鳴かなくなっており、乾燥の進行が影響していると考えられる。乾燥が進むと、両生・爬虫類ではアカガエルなどが減少し、さらに東京都ではカナヘビがレッドデータに掲載されている状況もある。カナヘビは子どもにとって身近な存在であり、「お庭の恐竜」というような感覚で捉えられることもある。子どもが生き物に関心を持つ入口としては、ダンゴムシやアリなどが挙げられるが、そのように身近な生き物の存在も重要である。「生物多様性」というと種の多さに着目しがちであるが、「生命多様性」という考え方のように、珍しい種だけでなく、生き物が存在していること自体の価値も重要ではないかなと感じている。その場所で生き物が生きていくこと、その存在が人に伝わり、「命を感じられる」と思ってもらえることが重要である。また、地域の人がある土地を残したい」と考える背景には、タガメがいるからということに限らず、ホタルがいることも含めて、生き物がいること自体の価値を感じていることがあると考えられる。

《委員》

これも今後の保全や調査に関わってくると思うが、尾崎金島地区の一つのシンボルとしてホタルがあると感じている。ホタルは幼虫時代に水中の貝を餌としているため、あそこのホタルを支えている貝が何なのか、一度確認しておく必要があるのではないかなと考える。恐らくあそこはモノアラガイがいない状態で、サカマキガイなどが多く見られ、アズキガイの可能性もある。ただし、サカマキガイやアズキガイはいずれも外来種である。そのため、仮にそれらが餌となってホタルが発生している場合、単純に外来種駆除を行うことで影響が出る可能性もある。現時点で、ホタルが何を餌にしているのか明確ではないため、特定しておく必要があると考える。

また、ミドリシジミについて、現地でも話が合ったが、幼虫はハンノキを利用し、成虫は花に訪れる。有名なのは栗である。特にイボタノキの花が関係する可能性があるため、今後の植物相調査の中で、5～6 月頃にどの程度開花しているかを記録しておく、保全の参考になると考える。

《委員》

本日は見学の機会をいただき、感謝する。大変参考となった。尾崎金島地区は広いことから、どこを残し、どのように整備していくかが重要であると感じた。まず地形の観点が重要であり、残すべき地形についての検討が必要であると考え。本地区では地形の特徴があまり見られない印象であったが、その点も含めて重要であると感じた。また、基本的には植生を軸に考える必要があると感じている。資料1の5ページの植生図では、8番のハンノキ林が特に重要であると感じた。最初に確認した箇所であり、岩槻委員からの説明も踏まえると、座生沼における過去の状況とも関連し、ミドリシジミとの関係からも重要な植生であると考えられる。さらに、カエルやネズミの調査経験からも、ヨシ群落は重要であると感じている。ヨシ群落の分布は広く、どの箇所が重要であるかについては、生物調査とあわせて検討していく必要があると考え。オギについては十分把握できていないが、複数の植生が組み合わさった環境も重要であり、その中から重点的に保全・整備する箇所を選定していくことが必要であると考え。

また、アカガエルが現在確認されていない理由は不明であるが、アライグマによる影響の可能性も考えられる。現地では中央部でアライグマが確認されていることから、その影響も含めて検討が必要であると感じた。加えて、水質の影響も考えられるため、pH等の簡易的な項目についても確認したほうがよいと感じた。さらに、柏市の「こんぶくろ池」というところがあるが、そこは地形が複雑で植生も豊かな場所であり、整備の事例を見ることも参考になるのではないかと感じた。

《会長》

地形という点で言うと、確かにこれまで目が行き届かなかった部分もあると感じているが、地形そのものは水の器であり、深い谷が氷河期にあったところは地下水面が高くなるとか、あるいは地下水の入れ物としての容量が十分あるかどうかということが、その環境をかなり規定する可能性があると感じている。そういう意味で、新保委員に伺いたいのが、地形的に水が豊かな場所は、尾崎金島地区の中でどの辺りが重要であると考えられるか。

《委員》

追加であるが、地形に加えて、可能であれば地質についても調べる必要があると感じている。この地域では地質に関する調査があまり実施されていないため、地質調査の実施も検討できるのではないかと考える。例えば、存じ上げている先生は現在、退職されているが、協力いただける可能性もあり、内容によっては地質調査を実施してもよいのではないかと感じている。

《事務局：宇田川部長》

事務局より補足する。地質については、先ほど水質や水温の話もあったが、現在は生き物の生息状況やポテンシャルを把握し、今後どの程度増えていくかを見ている段階である。その中でエリア設定も必要になると考えている。尾崎金島地区はかつて谷地形であり、本日確認した場所よりも手前のお寺の裏側のほうが、より深かったという印象がある。そのような状況も踏まえ、地質についても調査を実施していきたいと考えている。これまでの意見について補足するが、シードバンクに

については、尾崎金島地区は20年から25年ほど前から草刈りのみを行っており、水田としての利用はされていない。減反政策により草刈りのみが続いてきたため、ヨシの層が堆積しており、調査を行う場合はかなり深い層まで確認する必要があると考えている。場所を選定しながら、参考となる調査として実施したい。

また、カエルについては、十数年前には多く生息し鳴き声も大きかったが、現在はほとんど鳴き声が聞かれず、生息数も少ない状況である。その要因については重要な課題であると考えており、調査結果を踏まえながら、原因についても整理していきたい。想定以上にカエルが少ない状況であり、その点についても検討が必要である。

《会長》

カエルの話であるが、関東一円で夜にカエルを探し、鳴き声を聞いていた中で、特に注目していたのがシュレーゲルアオガエルである。外来種のように思われることもあるが、日本のカエルであり、名称はオランダ人のシュレーゲルに由来する。このシュレーゲルアオガエルが多く確認されていたのは関東の平野部であり、神栖市の辺りでも見られた。神栖市にはコウノトリが生息しており、シュレーゲルの鳴き声「クククッ」が、コウノトリの「コツコツコツ」という音と重なるように感じられ、その声で生息を感知しているという印象があった。シュレーゲルアオガエルは空中湿度が十分でないと生息できない種であり、神栖市の辺りでは潮風の影響もあり平坦な場所でも見られるが、この地域では森がないと生息できない。十分な空中湿度が確保される環境が必要である。関宿辺りでは、深い森があつてこそ生息できると考えられる。カエルであるため、皮膚が乾燥すると生息できない。また、卵は樹上ではなく土の中に産まれる。水田が利用されていた際には、その環境の中で産卵が行われていたと考えられる。鳴き声は地中から聞こえるため、姿が見えなくても生息を感じることができる。世代によってはシュレーゲルアオガエルの鳴き声を知らない可能性もあり、野田の子どもたちも聞く機会が少なくなっていると考えられる。先ほど生命多様性の話もあったが、生き物の息吹を感じることは重要であり、そのような視点も含めて調査を進めていく必要があると感じた。

《委員》

先ほど、地形や地質について触れるとの話があり、ありがたく感じている。地形の中で、お寺の裏側が深いとの話があったが、標高を測定できるとよいと感じた。標高については、東京理科大学の同好会の学生が実習で対応しているため、ボランティアで協力いただける可能性もあると考える。実際に現地に入り、深い箇所を歩きながら測定することができるのではないかと思います。標高の図面を作成することで、水の流れなども把握しやすくなるため、有効ではないかと感じた。

《委員》

これに関連して、先ほど会長から空中湿度の話があったが、尾崎金島地区に限らず、野田市、さらには平地全般において、土の乾燥化と空中湿度の低下がかなり深刻だと感じている。これが全体の多様性を低下させている要因の一つではないかと考える。植物の観点から見ても、日

本のように適度な降雨と湿度のある環境で生育してきた在来種が減少し、代わりに地中海など乾燥地に由来する外来種が増加している状況が見られる。尾崎金島谷津においても、西武台裏などで見られるイネ科群落はセイバンモロコシが優占しており、これも乾燥環境に適応した種である。このように、地域の生物多様性戦略を検討する上では、乾燥化の問題を踏まえていく必要があると感じている。一見、多様性が保たれているように見えても、生物相が貧弱化している可能性があり、その背景には乾燥化の影響が大きいと考える。その点も視点として持っておく必要があると感じた。

《委員》

私は昆虫の会を主宰しており、1991年当時、清水公園西側の座生沼の一带にはハンノキ林があり、非常に多くのミドリシジミが乱舞していたのを見ている。夕方になると何百頭も舞うような状況であった。この地域の開発事業計画を知り、当時の野田市長にハンノキ林の保全を要望するために、仲間らと市内およそ100か所のハンノキ林を調査し、ミドリシジミの生息状況をまとめ、この場所の保全が重要であるとの意見書を提出したところ、一部がそのまま保全されることになった。現在残っているハンノキ林は県の所有地の部分で、脇の観察道路は市の所有地となっている。当該ハンノキ林は遊水池の役割も担っており、幼虫が幹を伝って地表に降り、落葉の下で蛹化する際に水が入ることで影響を受け、当時と比べて個体数が大きく減少している。現在は1割程度まで減っている印象である。本日確認した尾崎金島地区のハンノキ林についても懸念がある。ハンノキが非常に大きく、15m程度の高さがあり、ミドリシジミは高木を好まない傾向がある。幼虫が成虫になる際、地表まで降りる必要があるため、高木では生育に影響があると考えられる。現地でも話があったとおり、小さなハンノキが林内に生育しているため、これらを活用・移植することで生息環境の改善が図れる可能性がある。ビオトープの観点からは、自然をそのまま残すだけでなく、ある程度の管理や工夫を行うことも必要ではないかと感じた。今後の整備方針については市で検討されるものと思うが、適切な管理により良好な生物環境を維持できるよう、協力していきたいと考えている。

また、ニホンアカガエルについては、三ツ堀里山自然園では多く確認されているが、本日確認した場所では少ない状況である。

丘陵地帯では雑木林の中でニホンアカガエルが確認されることがあるが、今日確認した場所は丘陵的な環境が少なく、いきなり高くなっており、アズマネザサが繁茂しているため、カエルが入りにくい環境になっているのではないかと感じた。今後、ビオトープとしてどのように管理・整備していくのか、また手を入れるのか入れないのかについても、引き続き検討していく必要があると考える。

《会長》

かつての座生沼に多くいたミドリシジミについて、当時の調査により、いた場所といなかった場所が整理されており、その調査結果が野田市に提供されているとのことである。これは非常に重要な情報であると感じた。また、ミドリシジミについては、食草の質に加え、成長後に蛹になる際に地表に降りたとき、水浸しになっていないことが重要であるとの話があった。そういう意味で考え

ると、若いハンノキが生えているということは世代更新が行われているということであり、尾崎金島地区の中でハンノキが世代交代できる環境が重要ではないかと感じた。ハンノキとミドリシジミをセットで考えると、ハンノキ林が世代交代できること、幼虫の食草が確保されていること、成虫の段階での環境が整っていることが重要である。イボタノキのような低木があることで、成虫の蜜源が確保されることも考えられる。イボタノキ、ハンノキの高木、さらに更新されるハンノキ林が組み合わせたり、持続的に世代交代できる環境が重要であると感じた。ビオトープを整備するだけでなく、生態系が継続して維持されるような設計が重要であると考えている。

以上のように感じたが、皆様の考えを伺いたい。

《事務局：宇田川部長》

本日は現地を確認いただき、それぞれいろいろな思いを持たれたと思う。尾崎金島地区については今後調査を進めながら、ビオトープの計画を作っていく予定であり、その中で本日いただいた意見を反映していきたいと考えている。ミドリシジミについても同様である。その上で、個人的な疑問として感じている点を共有したい。尾崎金島地区は湿地であり、里地里山の環境で、ホタルも確認されている場所であるが、不思議と何か欠けているように感じている。本来いるはずの生き物がいない一方で、別の場所では確認されるなど、環境との関係に違和感がある。市街地に近いことも影響している可能性があると考えている。この点を踏まえ、復元を考える場合、野鳥の層がやや薄いと感じているため、植林等により山林を補う必要があるのであれば、どの範囲までエリアに含めるかという点も含めて検討する必要がある。そのため、周辺の山林を含めたエリア設定についても意見をいただきながら、検討を進めていきたい。

また、環境学習の観点として、子どもたちに引き継いでいくためのフィールドとしてどのような要素が必要かについても意見をいただきたい。総合的に、訪れた人が「勉強になる」「面白い」と感じられる環境を残していきたいと考えている。本件は本日で終わりではなく、今後も検討を進めていくため、その第一段階として意見をいただきたい。

先ほど柄澤委員からあった要注意種、いわゆる侵略種に関する整理や、野田市の指標種についても検討が必要である。野田市として特徴的な生き物の層があることから、その整理も重要であると考えている。過去に野田市版レッドデータブックの作成も検討したが、整理が難しい面もあったため、今後の戦略見直しの中で改めて検討していきたい。行政としては、場所を守り、その場所をどのように活かし、残していくかという考え方が基本となる。種そのものの保全までは難しいが、そのような観点から意見をいただきたい。

《会長》

宿題をいただいたということで、どのような生き物がいて、どのような生き物がいないのか、そのバランスが欠けている点から何の情報を引き出すかという観点で、委員各位において、私も含めて、意見や気づきを整理し、記録していくということでよい。本日は午前中に現地を確認することができ、非常に有意義な機会であった。

《事務局：宇田川部長》

今回の調査の中間報告についてであるが、これを公表するか、非公開とするかについて、一度、皆様に判断いただきたい。この程度であれば公表してよいのではないかと、あるいは現時点では公表しないほうがよいのではないかとといった判断について、委員各位において判断いただきたい。なお、それについては意見シートでの提出でよい。

《事務局：池上係長》

公開・非公開の内容については、配布した意見シートに記入のうえ提出いただくか、後ほどデータを送付するのでメールで提出いただくか、いずれの方法でも差し支えない。最終的な公開・非公開の判断については、意見がまとまらない場合には、長谷川会長に一任するということご了承ください。次回の会議日程については、改めて調整のうえ、各位に連絡する。

《委員》

公開というのは、市のホームページに掲載するなどの形になるのか。

《事務局：池上係長》

そういうことになる。

《委員》

了解した。

《事務局：池上係長》

次回の会議日程については、改めて調整のうえ、各位に連絡する。

《事務局：茂木課長》

本日は多忙の中、市民会議に出席いただき感謝申し上げます。本日いただいた各種意見については、今後の調査を進める中で参考とし、検討していく。本日、意見シートにより提出いただく内容については、次回の会議において反映し、引き続き検討を行う。

以上をもって、第3回野田市生物多様性の戦略市民会議を閉会する。